

## 特集

# 街中で若者が集えるところ



若者は、学校や家庭、部活、サークル、塾、習い事以外の場所でどのように過ごしているのでしょうか。今回の特集はそのような問いから生まれました。

生活の中で自分が選択できる余暇の時間。読者のみなさんは、どのように過ごして来られましたか？ また、普段どのように過ごされていますか？ 今回の特集では、2つの団体で過ごす若者の姿を、その場をつくっている方の視点や想いから垣間見る形を取りました。ほんの一部に過ぎませんが、街中にそういった場所があることや、それが移行期の若者にとってどのような場所になりうるのか思いを巡らせるきっかけになれば幸いです。



## ぷちメッセージ

### 若者のミカタ

公益財団法人  
京都市ユースサービス協会  
専務理事  
上田 廣久



2022年7月にこの役職となりました。それまでは京都市職員で、子育て支援や児童福祉、地域教育や青少年育成に関わりました。

私が学生で就職を考えた時は、企業でのお金儲けは苦手と思い、教員採用試験は通らずに、市役所には入れて、定年まで勤めました。

しかし、今の時代は、終身雇用は少なくなりましたし、インターネットの普及等で、仕事や働き方は多様になっています。そして、感染症はじめ、地球環境や世界情勢など、心配事が多い世の中です。

そんな中で、これから若者が成長し、進路や生き方を探して幸せになれるように、私たちは、若者の「見方」を理解して、若者の「味方」になりたいと思います。京都市ユースサービス協会の目標は、「若者が生きやすい社会」をつくることです。

そのため、人が自然体に関わり合い、互いを尊重して信頼関係ができれば、力を合わせて目標に向かうこともできるでしょう。そのような場に、青少年活動センターなどがなればよいと思います。

（「若者のミカタ」は、当協会が取り組んでいる、若者文化発信事業『ユスカル！（若者文化市）』のテーマです）

## ごあいさつ

公益財団法人  
京都市ユースサービス協会  
理事長  
安保 千秋



本誌は40号を迎えました。皆様のご協力に深く感謝申し上げます。今後も「若者を考える、若者と考える」広報誌として発信を続けていきたいと思います。

さて、2023年4月、こども家庭庁が創設され、こども基本法が施行されます。こども基本法2条は、こどもを「心身の発達の過程にある者」とし年齢を定めておらず、こども家庭庁は、子ども・若者育成支援に関する事項の企画、立案、総合調整を行い、今後、若者政策に大きく関わることになります。

すでに、政策決定過程におけるこどもの意見聴取とその反映及びこどもや若者の参画に関し、調査研究が始まっています。子どもから若者まで連続して切れ目ない支援を行うことは大事ですが、若者の独自のニーズがくみとれるのか、子どもの陰に隠れてしまわないか、積極的に参画する若者や支援の取組が始まった社会的養護出身者等以外の大多数の若者の意見表明や参画を進めることができるのかなど、心配な点があります。ともに注視していきましょう。

公益財団法人京都市ユースサービス協会は、京都市内7カ所の青少年活動センターと、子ども・若者総合相談窓口、生活困窮世帯の学習支援事業、社会的養護自立支援事業の一体的かつ効果的な運営を指定管理者として受託しています。青少年活動センターは、それぞれの施設・設備に特徴があって、個性的な事業活動をしています。また、厚生労働省から若者サポートステーションの運営を受託し、若者の社会的自立や職業的自立に向けた支援も行っています。

## ユースサービスの理念

「ユースサービス」とは、子どもから責任ある大人へと成長する青少年を支援することです。子どもたちが家庭、学校、地域社会、職場などを通じて成長し、自分自身の興味や関心を高める過程で、必要に応じて助言や情報、または多様な人的・物的資源が得られるような機会を提供します。そして青少年自身の積極参加によって、青少年と協働の豊かな地域社会を創り出すことを目的としています。



Instagram  
はじめました。

おたえる



# 「ここに来たら、自分を受け入れてくれる。 そんな場所でありたい」

## ママキラ☆プロジェクト 上川 里枝さん

私たちは、これまで8年にわたって、地域で「カレーパーティー」を開催してきました。それが、子どもたちの口コミで広がって、多い時は90名もの人が食べにきてくれていました。コロナ禍になって、あらためて「私たちは何がしたいのか」を考えたとき、「子ども食堂を立ち上げて活動の輪を広げること」。そして、「子育て中のママの居場所づくり」を、両輪で行っていく必要があると思いました。

そうして活動を広げていく中で、大学生からのボランティアの問い合わせが多くなり、今では50名が登録するまでにになりました。

まず問い合わせがあったら、一度面談をします。能力の有無は関係なくて、落とすための面談ではありません。その大学生が、何が好きで、どんな趣味を持っている、どんな勉強をしているのかなど、その人を知るためのものです。その後、グループラインに登録し、行事ごとに声をかける形をとっています。

活動の後に、大学生だけで「振り返りのコーヒータム」を設け、そこでいろんな話が出てくるんです。勉強のこと、恋愛のこと、就活のこと、家族の話からの親孝行や、居場所の条件に至るまで、深い話に発展することもあります。彼らは、自分達のことを「コロナ世代」と言っていて、他県から京都に出てきて、せっかくアパートを借りて一人暮らしを始めたのに、授業はオンラインばかりで、サークルもない。そんな彼らにとって、ママキラ☆プロジェクトのボランティア活動は、コロナによって自分の居場所を見失った若者達の、受け皿になっているのだと思います。



# 「学校や家以外で、やすらげる場所がほしい」

## 特定非営利活動法人Reframe くらら庵 朝倉 美保さん

私はくらら庵の隣で5年前から塾を運営しており、学校で過ごすことがしんどい人や勉強についていけない人に学習を教えました。塾にも不登校の人がいますが、まだ学習の段階ではない人は塾には来ることができないので、何か違う形で支援ができないかな、と考えるようになりました。コロナ禍に入って、ますます行き場所がない人たちが増えたタイミングで、ちょうど隣が空き家になったことから、1年半位前に不登校の居場所づくり活動を始めました。

当初はなかなか利用してくれる人がおらず、二ズと合っているのか不安になったこともありました。さまざまなイベントをきっかけに認知度が上がっていきまし。現在は小中学生23人が利用登録をしてくれており、毎日8人くらいがくらら庵に来てくれています。

それと同時に、くらら庵の運営に若者がボランティアとして関わってくれるようになりまし。大学生や就職活動中の人、仕事後や休みの日に参加してくれる人もいます。現在50人のボランティア登録があり、そのうち毎週10人くらいが活動してくれてます。ボランティア活動を通して「子どもと関わる中で自己肯定感が上がりました」という人もいます。ボランティア同士で話す機会も多く、活動を通していろいろな気づきにつながっているようです。

また、昨年は、二人で悩んでいるだけじゃなくて、誰かと対話できる場が欲しい」という大学生がいたので、若者のための場所を作ろうと一緒に活動もしていました。

### 上川さんの 想い

大学生のみんなに、ここを「自分の居場所だ」と感じてもらいたい。誰にだってしんどい時はあるし、そういう時に「あそこに行ったら話を聞いてもらえるかも。助けてくれるかも」と思ってもらいたい。ボランティアをしてもらうだけでなく、その向こう側にある「つながり」を大切にしています。

人は、「そこに居場所がある」と感じるのは、「自分が誰かの役に立っている」と感じられるときだと思います。だから、大学生に「誰かのためになっている。誰かの喜びに繋がっている」という実感を持つてもらえるように、活動しています。

大学生は、最初はみんな「初めまして」なのに、活動の後は、とても仲良くなっている。自然にLINE交換をしています。そういう繋がりは、ここを卒業してからでも、ずっと続いていくと思います。私たち自身も、若者との「縁の輪」が、いこうと大きく広がっている実感があります。うちで活動している大学生は、本当にすごい子が多くて、コロナがなかったら、サークルや部活で活躍していたであろう子たちです。今後、ここを旅立ったら、きっと社会で活躍してくれると思います。そんな彼らが、いつの日か戻ってきて、また何か一緒に活動できる日がくるかもしれない。そうになったら、ママキラ☆プロジェクトを、次のステージに連れていってくれるような気がします。そんな未来を想像すると、本当に楽しみです、ワクワクします。

### 朝倉さんの 想い

私自身は家の居心地が悪かったんで、学校しか居場所がありませんでした。でも、もしその時に別に安心できる居場所があったなら、きっとそこに行っていたら違うなと思うことが多いです。

くらら庵に来ている子どもたちは、学校への拒否感や不安な気持ち強い子が多いので、まずはのびのびと楽しく過ごしてもらうことを優先して見守っています。保護者の方からは「学習をしないままでも大丈夫なのか」と聞かれることも多いですが、最近は通信制高校も増えて来ているので、まずは「学びたい」という気持ちを大事にしながら進路についても一緒に考えていきます。保護者が希望された場合にのみ学校とも連携して、放課後などに学校に行ったときに先生と話をするきっかけになるように、日々どのようにくらら庵で過ごしているのか、どんなことが好きなのかなどを書面で報告し、出席日数にもカウントいただいています。現状としては遊びや交流目的の子は今のくらら庵で十分満足しているのですが、学校に行かない分の学習を補うことが目的に見学に来る子もいるので、その子たちが過ごしやすい場所があってもいいかなと思っています。

また、ボランティアの若者の中にも、大学へ行く意味を見出せないと言う人もいます。ここでの活動の中で、学校の意味ややりたいこと、楽しいことを振り返るきっかけになれば、と思っています。







# 簡単に奪われる 若者の居る場所



ユースワーカー協議会代表  
水野 篤夫

ここでは、若者が街中で集える場所の意味について少し書いてみます。最近の調査で居場所の有無を聞く設問に対して、「家庭が居場所」との答えは80%以上あり、「家庭以外にも居場所がある」若者も70%あまりと、思ったより高い割合に見えます。しかし、家庭以外の居場所として多くの若者が挙げたのは、「友だち」「学校」くらいでした。では、学校・職場に居場所が無い、残りの若者(9%近く)はどこで過ごしているのか？そして学校で居場所を失ったり、友だち関係が壊れたらどこに居場所があるのでしょうか？先日会ったある大学3年の学生は、「大学入ってすぐコロナで、誰とも会わず日々が過ぎ、心を病みそうでした」と言いました。自分の力でいくらでも居場所を作っていけそうに見える若者ですら、病みそう、な社会。簡単に若者の居場所は損なわれるということとが、「コロナ禍で露わになってきたのを感じます」。

「余暇」というとても軽い響きになってしまつたのですが、家庭・学校／職場と別の「第三の空間」と言い換えるとその意味も受け止め方が変わるかもしれません。若者がそこで他者と出会うこと、居る場所を見つけること

の意味は、ここまで紹介してきた活動からも見て取ることが出来る。『家庭が大事』といいつつ、もはや家族だけで生き抜くことは難しく、家族規範・学校価値で縛られることのない場を模索する若者がこれほど多いことを考えれば、若者が自由な時間・空間が探せたり、自分で作れたりする「余裕」もしくは許容する余地のある社会を作っていくことは、本当は若者に限らずとても大事なことになるのだと思います。

若者が過ごす場所として、ショッピングモールやフードコート、映画館、カフェやファストフード店等をイメージする人もいますが、これらは「居る場所」ではない。図書館や公園といった公共的な施設の持つ価値は大きいですが、若者が特に優先して使える訳ではないことから、さまざまな制約が課せられます(私語は慎んで！「球技禁止」「スケボー禁止」)。またネット空間も重要性を増していますが、若者誰もが自由に振る舞えるとは限らない(複数のアカウントでキャラクターを使い分ける若者など)ことに注意が必要です。ユースワークが大事にしている目標の中に、

「若者とともに、若者の自己選択と決定が保証される自由な活動の場を作る」という考え方がありますが、青少年活動センターのような公共施設がそのための場になることはもちろんのこと、地域の各所にそうした価値観を保障できるような場が点在する形が作れたら良いなと思うのです。青少年センターの無いエリア(例えばニュータウン等)にユースワーカーが向いて若者と関わりを紡ぐ活動(アウトリーチ)や、夜遅い時間の居場所づくりをしたり、地域で若者と出会う大人がユースワークの価値観を知って、若者の側に立つて地域・社会との媒介役となってくれるよう後押しをしていく活動などを通して、すべての若者に「余暇の自由空間」を保障することが出来ればと思うのです。

話をまとめると、そうした、壊されやすい若者の居場所づくりの営みを支えていく人が、「街」のいろいろな所にいる地域社会こそが、若者を「はぐくむ」ものなのだと思います。

『YOUTH SERVICE』を読んだ皆さんにもその「員」になってもらえれば！

\* (註) 18歳意識調査第24回(子どもと家族) 日本財団 2020年4月28日より



## 「ライブは楽しく自分を表現できる場」

京都MOJO 藤本 浩史さん

「MOJO」は1999年にオープンしたライブハウスで、オープン当初はブルースやファンク、ブラックミュージックなどの音楽を中心としたライブハウスをイメージしていましたが、段々と若いバンドが増えて今は高校生の年代から働きながらという人まで、いろいろな世代の方が幅広いジャンルで演奏されていますね。

若い子に遊びに来て欲しいという思いから「高校生割引」という様なサービスもやっていました。高校生バンドイベントは定期的にやっており、そういう時は沢山の高校生が観に来ます。友達のバンドを観に来たことをきっかけに、自分もここでライブやりた、って後輩がバンドを始めることもあって、自然と下の世代にも繋がっていくこともありま。高校生イベントでは、初ライブという人も多くフレッシュな感じですね。大学生になると、初めての時から何度もライブしている人もいて様々です。

最近の傾向として、女性でバンドをやる人が年々増えている印象があります。

また、「コピーバンドさんとかだと、演奏する曲やアーティストの移り変わりが早いように思います。バンドの「コピー」というよりは、違うバンドの中から一曲ずつ好きな曲を選んでいくことが多く、最近の音楽の聞き方に影響しているのかもしれない。音楽に関して、メディアも多様になって情報膨大なので、そういう流行とかを若者達から学ぶことも多いですね。お店に出演しているバンドの割合としては大学生が多いです。大学で軽音サー

クルに入って始める人が多いですね。やっぱり高校生のライブは感動しますよ。彼らにとってライブできるのってすごい年1〜2回位なんです。そこに向けて練習してきていて、それを応援しようとする友だちの姿を見ると感動します。

その1回のライブってその子たちにとって本当に大事なものと感じます。

たまに「昔出たことがある」という人と何年後かに再会するという素敵な出来事もあったりしますよ。

ライブって本当にいろんな勉強になると思っています。複数の人間で1つのものを作りあげて表現することや、ライブ当日は他のバンドやお客さん、お店の人とのやりとりもあって、必然的に人と関わる機会が増えます。その中で礼儀を学んだり、楽しいことはもちろん、悔しい、苦しい思いもしたりする。実際自分もコミュニケーションが得意ではなかったんですけど、バンドをやることで成長できる事が多くありました。はじめは好みではない音楽でも、いつの間にか興味持てるようになって見聞が広がり、好きなものが増えるきっかけにもなると感じます。

若い人はなかなか踏み込めず躊躇する人もいると思うんですが、やってみて損することはないし、普段体験できない熱狂があります。自分にとってプラスに思っていること、是非一度バンド活動やライブすることを感じてほしいですね。そういう場所でありたいなと思います。